
AC ~ IS worldへの転生 ~

RAI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

AC 3 IS worldへの転生

【Nコード】

N6719Z

【作者名】

RAI

【あらすじ】

レイレナード社製のAC三機を相手にして落とされた可哀想な奴の物語。

最近ACにはまって作ってみよう！と思ったりw
思い立った日が吉日。その日以降は凶日。という信念の元に作り
ましたあ！

もう一個書いてるので更新遅かったり、駄文だったりするけど頑

張ります！！

00話 プロローグ

いつもどおり。いつもどおりの戦場だった。俺は3機のノーマルに一気に接近しながら1機を左手のブレードでなぎ払った。ノーマルは腰のあたりから真つ二つになり、爆発した。

接近してきたもう1機のノーマルをクイックブーストで引き離し、肩武器のハイレザーキャノンで腹の辺りに大きな風穴を開ける。最後の一体は右手のマシガンで体中に風穴をあけて戦闘を終わらせた。

「作戦終了・・・ですね。」

そう言ったのはいつも作戦をナビゲートしてくれるクロエだ。正直、彼女が居なかったら俺は生きてなかったかもしれない。前にもそう礼を言おうとしたが、言い切る前に「自分は何もやっていない。前線で戦っているのは貴方だから。」といわれてしまった。

「！！！！ 所属不明！いえ、レイレナード社3機のネクストを補足！あれは・・・ベルリオーズ！？何故No.1がこんなところに？迎撃して！」

・・・生きて、帰ってきて・・・」

「ああ、もちろんだ」

俺はそう答えると、肩に積んでいるスナイパーライフルを構え、と敵が来るはずの方向に狙いを定めた。

先制で攻撃したのは俺だ。対象はベルリオーズ。距離800程度、発射。命中した、がPAに阻まれるのでたいしたダメージはないだろう。

左手にブレードを持っていつものスタイルに切り替える。まずは一気にオーバードブーストで接近してきたN o . 1のベルリオーズだ。マシンガンで牽制しつつ、一気に接近してブレードでたたく。これもP Aに阻まれるが相当P Aを消費しているだろう。

クイックブーストで距離をあけてからまた接近する。再度ブレードを叩き込もうとするがかわされる。マシンガンで牽制して距離を取ろうとするがそれも敵わない。

横目で他の二機も探すが、既に近くに来ているようだ。

「このままではつらい・・・」

俺はそう呟くと一気にたたみかけようとした。

ザンニがA Sミサイルを放つ。何とかよけるが、正直きつい。オルレアが一気に接近し、ブレードを放つ。

何とかまだ動くが、もうブーストを焚くこともできない。ベルリオーズが近づいてくる。

「わりいな。これやんないと死ぬんだわ、俺たち。」

意味深な言葉を残し、ベルリオーズはおそらく予備兵装のブレードでコックピットを突き刺した。

目を開いた・・・。

眩しい、眩しすぎるほどだ。GAの特殊閃光弾を間近で見ても、ここまでダメージは受けなかっただろう。

つか、俺死んだんじゃないの？夢か？

自分の頬をつねってみる、痛い。夢じゃないみたいだ。

ここはどこだろう。

「目覚めたか。」

目の前に女の子が立っていた。結構可愛い。ロリじゃないよ？まじで。

「あんた誰だ？ここはどこだ？俺は死んだのか？どうなんだ？」

「そんなに一気に質問されても・・・。」

まず、私は神（作者）です。邪神です。この姿は仮です。いきなり殴られる可能性を考慮してこの姿にしました。

ここは私が作りあげた空間です。まあ、異世界ですね。

貴方は死んでいます。

これくらいですか？質問は。」

俺が死んだ理由は分かりきっている。負けたのだ。

「あと一つだけ質問がある。奴が・・・ベルリオースが最後に残した言葉の意味は？」

「ベルリオーズですか……。彼は私（作者）ではない、もう一人の邪神に服従させられています。彼の仲間もそうです。もはや半分以上のリンクスが邪神に服従しています。現在私はもう一人の邪神と敵対関係にあります。邪神は私の管轄の世界を侵略しようとしています。」

その世界には女性しか動かすことのできない『IS』という機械があります。貴方たちが使う『AC』と同じものだと考えていただいてかまいません。

貴方にはその世界へ転生して、邪神の野望を打ち砕いてほしいのです。」

「もし断つたら？」

「生き返らせることはできないので、このまま最後の審判を受けてもらいます。」

「最後の審判って？」

「善か悪か、天国で暮らすか地獄で暮らすか、を決めるところです。私が見たところ貴方は地獄の方かと……」

「分かった。受けよう。俺にはISが使えないがどうやって打ち砕けばいいんだ？」

「現在貴方が使っているACをISサイズにします。邪神は、世界に直接手を加えることができないので奴の手駒をすべて撃破してください。」

ついでに、ACの機体パーツや武器をすべて使えるようにします。準備はいいですか？」

「ああ。」

「じゃあ……。堕ちてください^^」

突如俺の足元に大穴が開き、俺は落下した……

00話 プロローグ（後書き）

>補足説明<

主人公について

クロノール・アルジーク・オブアイレン 17歳 男

名前からしてホワイトグリントの子供

え？設定が無茶だって？ 気にしない！

だって私はこの世界の神！（邪神だけどw）

01話　く始まりく（前書き）

短いです。二次創作よりオリジナルのほうが楽だと思っのは何故でしょう？

01話　　始まり

神に落とされた俺はおそらく相当高いところから落ちているようである。眼下には暗い町が広がっている。何故か恐怖心が無い・・・人間、恐怖心を失ったら終わりだと聞いたことがある。

どんどん家が近づいてくる。近づくたびに現実味が増したためか、俺の心に『死』という恐怖が生まれた。そのおかげか逆に冷静になり、現在ACに乗っていることに気づいた。しかし、俺の知っているACとは違った。俺の体にまわりつくようにパーツが構成されておりコックピットがない。

ブースターを動かして減速を図るが、地面との距離が近すぎて墜落してしまった。幸いPAがダメージを吸収してくれたが、もっと気づくのが遅れていたら危ないところだった。

「だ〜れっかな？お空からおちてきたのわ？？」

「・・・・・・」

いい大人がウサミミつけているのは見てるほうとしてはちょっと、いやかなりイタイ。

「あれ〜？だんまりかなあ〜？おねーさんこまっちゃうなあ〜」と、とてもいい笑顔で言ってくるのはちょっと恐怖だ。

「俺はクロノだ。クロノ＝アルジーク・オブアイレンだ。」

「ふ〜ん。クーちゃんが纏ってるのってISだね？けど見たこと無いんだよね〜、あんなパーツ。」

動かせるの？IS。けど、纏ってるってことは動かせてるんだよ

ね？」

なにやらブツブツ言っている。やっぱり怖い。

「あんたは誰だ？」

「あつ。え？わたし？」

私は束だよ！篠ノ之 束よろしくね！」

相当考え込んでいたようで、驚いている様子が結構可愛かった。

『束はISを作った人だよ』

突然頭の中に声が鳴り響いた。声的には神だ。

「ところでここはどこだ？」

「ここ？わたしの家だよ。君やっぱりISを動かせるんだよね？」

「ああ」

「これってなんていう機体なのかな？」

「ああ、これか。これはイクシオン？だ。レイr・・・」

危ない。もう少しでばれるところだった

「まあ、いいや。で、なんで空から落ちてきたの？」

「それは・・・」

『その人にはすべてを打ち明けていいよ。』

神にそういわれた俺は、束にすべてを打ち明けた。俺は違う世界から来たこと、イクシオン？はACと言うものがベースだということ、この世界が危険に晒されていること。

束も最初は半信半疑だったけど信用してくれたようだ。

『俺が言つといたからな』

神が先回りして言つてあつたらしい。

そつえば俺家が無いんだよな。

「家ならここに泊まるといいよ。IS学園は全寮制だからそれまでここに。」

「有難う御座います。」

「じゃ、部屋はこつちね。」

IS学園には入るの？入ったほうがいいと思うけど？」

『入ったほうがいいと思うよ（原作的に）』

「入ろうと思っています。」

「うん、ちーちゃんに話しておくね！」

「はい」

ちーちゃんって誰？

「あつ、それと機体を見せてくれるかな？」

「別にいいですよ」

ISを作った人なら任せても大丈夫だろう。

「おやすみ」

「おやすみなさい」

腹減つたなあ・・・と思いながら眠りに着いた。

「ん、見たこと無い機体だし、こんなコア見たこと無い。
ん？これはブースターか？それにジェネレーター。」

自分でエネルギーを作り出すISか・・・。

拡張領域も今のIS用装備の種類全部入れても使い切れない・・・

おもしろい」

彼女は最後に《にこっ》と笑うと機械の前から離れた・・・。

01話　く始まりく（後書き）

下手で駄文ですが、どうかあたたかあい目で見てください。

02話　く初戦く

今日はIS学園に入学する予定だ。もちろん1年生に・・・入学というよりも、転校？違う。

誰かが校門のところで騒いでいた。

「　　」
んで、そんな奴が代表候補生なの！？」

うん、第一印象確定。高飛車な奴だ。正直苦手だし嫌いだ。
無視して職員室へいこう。

「お前か、束が話していた『二人目の一《男》のIS操縦者』は」
束が話していたちーちゃんという人だろう。

「はいそうです。貴女が『ちーちゃん』という人ですか？」
突然前方から出席簿が飛んできた。手刀で出席簿を叩き落したが、当たってたら意識が無かったかもしれない。
彼女のほうを見ると顔が赤くなっている。

「　　」
をいつているんだ！あいつは。」

俺が思いつきり疑問の表情を向けると、はっとしたように顔を上げ咳払いをした。

「私は織斑　千冬だ。ここで教師をしている。話は束から聞いている。お前は私のクラスへ入れ。」

学校を案内させるように、と一夏にいつておいた。この学校にいるもう一人の『男』の操縦者だ。仲良くやれ。」

「分かりました。」

「よし、行け。」

そう言うつと、織斑先生はどこかへ行つた。

俺は教室へと向かった。

ほとんどの女子一（女子しか居ない）が俺を奇異の目で見てくる。正直言つてつらい。もし目線に物理的干渉能力があつたなら、俺はただの肉塊になっているだろう。うん、間違いない。

どうでもいいことを考えながら廊下を歩いていると突然話しかけられた。

顔が良く整つていて、金髪。ドリルのように髪を盛っている。腰に手を当てるポーズ様になっている。

いいとこ育ちか・・・これも苦手だ。大抵の奴は、仮面をかぶつてやがる。

「貴方が、私のクラスに入るといふ『二人目』の男のIS操縦者ですわね？」

「ああ、だからどうした？」

「なんですn 「やめろよ」「」

男のほうが牽制した。

「俺は織斑 一夏。よろしくな。」

「俺はクロノ、クロノ＝アルジーク・オブアイレンだ。クロノと呼んでくれ。」

「わかった。じゃあ校舎を案内するから着いてきてくれ。」

校舎はどこも立派だった。ガラスの廊下、ACが二機入るようなアリーナ。凄く広い。

後は、本当に女子しか居なかった。先生も女性だけだった。

IS学園は寮生活らしい。俺には一人部屋があてがわれるとか・

まあ、女子と相部屋なんて考えられないけどな。

朝の時間目いっぱい使ったので、教室に戻ったら既にHRが始まっていた。

「遅い。と言いたい所だが、大目に見よう。」

俺は、またあの死ぬかもしれない出席簿をくらうことを想像して身震いしていた。

無事にHRは終わり授業が始まったんだが・・・まったく理解できない。

専門用語が多すぎて、何を言っているのかすら分からないといった状況だ。

ただ一つ分かるのが、織斑先生が時折殺気を放つのと、出席簿が飛んでくるのだけだ。

次の授業も同じく。そういえばクラス対抗戦とやらがあるらしい。俺には関係ないが、代表同士が戦うそうだ。

一組対四組だ。四組の代表があの高飛車野郎らしいので機会があれば潰したい

まあ、ともかく今は明日開かれるクラス対抗戦だ。一夏の特訓にも付き合わなきゃならない。

それにしても、自称一夏のコーチの箒とセシリアの説明は分かりにくい。

箒曰く「ギョンてしてからガン」

セシリア曰く「斜め上に42度・・・」

この説明で分かった方は、きっと天才か頭のねじが足りないのだろう。うん、そうに違いない。

時は流れて、対抗戦当日。

一夏と鈴が戦っていると、突然頭の中に音声が流れた。

『いるかい？まあ、居るに決まってるよな？』

向こうの邪神が動いた。敵機がこっちへ向かっている、迎撃しろ。

敵はアマジークだ。

アリーナへ向かっている。

気をつけるよ？』

（わかったよ）

答えると俺はアリーナへ向かっていった

アリーナに行くと既に二人が戦っていた。

「何なのよ！あいつ！」

「知るか！来るぞ。」

マシンガンが鈴が居るところをなぎ払う。

かろうじて直撃は避けたが、エネルギーももう限界だろう。

俺はイクシオン？を展開し、マシンガンでアマジークを牽制する。

現在の機体構成は03アリシアをベースに、マシンガンー（03-MOTORCOBRA）、ブレードー（07-MOONLIGHT）のみの軽装備である。

俺はクイックブーストで一気に距離を詰めると、ブレードを振るう。

流石に避けられるが、さらにマシンガンを浴びせる。これは当たるがPAによってたいしたダメージは無いだろう。

無理矢理クイックブーストによって軌道を変え、再度接近する。

「くっ、だが仲間の命のためにも！負けるわけにはいけない。」

確か、アマジークは何かに対抗している組織の中心メンバーで、仲間をコジマ汚染させないとか言って一人で戦っていたんだっとな。邪神に仲間を人質に取られたのだろう。

俺も死ぬ気は無いからな。

接近した後、ブレードで叩き落とし肩武器を展開する。YAMAGAだ。

地面に叩きつけられたバルバロイは1秒ほど動けないだろう。戦場ではその一瞬が命取りになる。

俺が元居た世界では25000ものダメージを与えることができる

るお気に入りだ。

これを使えば、バルバロイなど消し飛ぶ。

「終わりだ」

肩の武器が火を噴いた。俺は爆風で吹き飛び、天井に激突した。そこで俺の意識は途絶えた。

02話　く初戦く（後書き）

なんか、意識途絶えて終わるのが多いのはまぐれでしょうか？

私のせいですけどねw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6719z/>

AC ～IS worldへの転生～

2011年12月29日23時51分発行